

2021年 博士フォーラム実施報告書

# 博士学生のキャリアプランを考える

日時

2021年12月6日（月）9:30～12:50

Zoomによるオンライン開催

幹事校 北海道大学

## 1. はじめに

一般社団法人八大学工学系連合会（北海道大学、東北大学、東京大学、東京工業大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、九州大学）は、八大学に属する 9 工学部、及び 25 研究科・研究院で構成し、互いに協力して諸課題の課題抽出や情報交換を行いながら、課題解決や対外的な意見発信を行ってきた。この連合会事業の一つとして、博士フォーラム事業があり、八大学が持ち回りで開催している。2021 年は、北海道大学が幹事校となり、「博士学生のキャリアプランを考える」というテーマを掲げ、オンライン方式で開催した。

日本人学生の多くは、修士課程修了後に企業等に就職する道を選択する。博士課程に進学する学生数は修士のそれに比べ極めて少ない状況が続いており、この問題は八大学工学系連合会でも継続して議論されてきた。しかし、博士課程への進学者を増やすための具体策や有効策は必ずしも見出されていない。一方、博士課程に興味を持つ場合であっても、博士在籍中や修了以降のキャリアプランが見えづらいために、進学を躊躇する学生も一定数いると思われる。さらに、今年度から新たに導入される「ジョブ型研究インターンシップ」に関しては、自身の研究、就活、将来設計等にどう結びつくか疑問をもつ学生も少なくないであろう。本フォーラムでは、これらを背景として、博士人財への期待と国の各種支援政策に関する基調講演や、博士課程修了後の若手研究者・技術者の講演を企画するとともに、参加学生同士のディスカッションの場を設け、自己のキャリアプランを考える機会を提供した。

## 2. 参加者

### 2.1 2021 年 博士フォーラム実行委員会

#### 【学生】

岩井 愛	北海道大学	D2
大屋 祐太	北海道大学	D2
薛 高格	北海道大学	D2
棚橋 慧太	北海道大学	D1
金浜 瞳也	北海道大学	M2
船木 優太	北海道大学	M1

#### 【教員】

瀬戸口 剛	北海道大学 大学院 工学研究院 研究院長
泉 典洋	北海道大学 大学院 工学研究院 副研究院長
中村 孝	北海道大学 大学院 工学研究院 研究院長補佐

### 2.2 準備協力学生

笠井 美玖	東北大学	D1
河田 早矢	東北大学	D1
鈴木 健介	名古屋大学	D1
村田 裕斗	名古屋大学	D1
渡邊 俊	名古屋大学	D1
清水 桜子	京都大学	D2
八木 魁人	京都大学	D2
周 安博	大阪大学	D2
石黒 理沙	大阪大学	D1
王子 銘	九州大学	D3
河原 康仁	九州大学	D1

### 2.3 参加登録者

参加登録者は116名であった。資料1（巻末）に参加登録者名簿を示す。登録者の内訳は、博士学生40名、修士学生41名、学部生16名、PD1名、研究生1名、教職員等17名であった。様々な分野から多くの方に参加頂くことができた。特に、博士学生だけでなく、修士、学部の学生からも多数参加頂けたことは、一定数の学生が博士課程を将来の選択肢の一つに考えていることを示唆するものと思われる。

### 3. プログラムおよび概要

日時 : 2021年12月6日(月)9時30分~12時50分

テーマ: 博士学生のキャリアプランを考える。

方式 : Zoomによるオンライン方式

内容 :

(1) はじめに : (9:30~9:40)

北海道大学 大学院 工学研究院長 瀬戸口剛 教授

(2) 基調講演 : (9:40~10:30)

「博士人材の活躍—Society5.0を牽引する「知」の担い手—」

文部科学省 高等教育局 専門教育課 中澤恵太 氏

(3) 若手研究者・技術者からのエール : (10:40~11:40)

- 東京大学 大学院 工学系 研究科 安川和孝 氏 (東京大学 2015年 博士課程修了)
- 物質・材料研究機構 吉中奎貴 氏 (北海道大学 2018年 博士課程修了)
- 東亜合成株式会社 熊谷康平 氏 (大阪大学 2021年 博士課程修了)

(4) 参加者による意見交流会 : (11:50~12:40)

(5) まとめ : (12:40~12:50)

北海道大学 学生実行委員

D2 岩井愛、D2 大屋祐太、D2 薛高格、D1 棚橋慧太、M2 金浜瞳也、M1 船木優太

北海道大学 大学院 工学研究院 副研究院長 泉典洋 教授

#### 4. 「基調講演」の概要

演 題： 博士人材の活躍－Society5.0 を牽引する「知」の担い手－

講演者： 文部科学省高等教育局専門教育課 中澤恵太 氏

基調講演では、① VUCA 社会の到来－Society5.0 に向けて－、② 博士課程を取り巻く現状について、③ジョブ型研究インターンシップについて、の3つの話題が提供された。

①については、2000年頃と2020年の社会を、会社の時価総額、情報発信や数理・AI・データ分析技術、資金調達方法などの観点から比較し、Volatility（変動性）、Uncertainty（不確実性）、Complexity（複雑性）、Ambiguity（曖昧性）に特徴づけられる現代では、DXが知識集約型社会への牽引役となること、博士課程への役割が益々重要になることなどが説明された。

②については、日本の博士号取得者の人口に示す割合は英国、ドイツ、米国など主要国に比べて低く、その減少傾向が続いていることが示された。一方、博士課程に進学しない理由としてアンケート調査から明らかになった「生活の経済的見通しが立たない」や「博士修了後の就職が心配」などに対処するために様々な制度設計を行っていること、特に第5期科学技術基本計画では博士課程在籍者の2割程度が生活費相当額を受給することを目指していることなどが紹介された。

③については、博士のキャリアパスを拓げる方法のひとつとして、本年度から実施されているジョブ型インターンシップが紹介された。2か月以上の長期間かつ有給であること、正規の教育課程の単位科目として実施されること、マッチングでは企業からジョブディスクリプションが提示されること、などの概要が説明され、参加企業、参加大学が紹介された。

## 5. 「若手研究者・技術者からのエール」の概要

### (1) 東京大学大学院工学系研究科 安川和孝氏（東京大学 2015 年博士課程修了）

安川氏は修士課程修了後、環境省に入省して 2 年間勤務した後に、博士後期課程に入学されている。一度社会に出てから博士課程に入学した経緯を踏まえ、博士に進学した理由、キャリアプランを考える上で重要だった点、博士課程の支援に必要と思われることなどを具体的にお話頂いた。特に、国を動かす中央省庁行政官としてのキャリアと、真理を探究し新技術を創造する研究者としてのキャリアのどちらを選ぶか大きく迷った経験や、最後は好奇心から博士課程に進学する道を選んだ経緯など、進路選択に関わる自身の体験をご紹介頂いた。最後に学生の皆さんへのアドバイスとして、働き方やキャリアパスが多様化している中で、博士号は生涯かつ世界中で使える技能証明であり、特に理工系博士は社会の様々な場面で活躍できるとのお話を頂いた。

### (2) 物質・材料研究機構 吉中奎貴氏（北海道大学 2018 年博士課程修了）

吉中氏は博士後期課程修了後、物質材料研究機構に就職し、現在、建物の制振ダンパに用いる耐疲労性の高い合金を社会実装まで見据えて開発する研究に携わっている。博士への進学は、修士 1 年に行った企業インターンシップにおいて、金属疲労の研究が実際に社会に役立つと知ったことが契機になったとのことである。その後、この分野の研究成果は一企業で抱えるより広く公開すべきものと考えようになり公的研究機関で働くことを目標にしたこと、そのためには博士号の取得は最低条件であったことなどを紹介頂いた。博士進学を選択に対しては、家族の理解、所属研究室の雰囲気、博士課程の先輩と一緒に博士に進学する友人の存在、などの周囲環境も大切であったとのことである。学生の皆さんへのアドバイスとして、自身の研究テーマの遂行能力だけでなく、課題設定や研究戦略立案能力、周辺分野への興味なども育てて欲しいことや、今後の研究者にとって英語の運用能力が不可欠であり、これを磨いて欲しいことなどをお話頂いた。

### (3) 東亜合成株式会社 熊谷康平氏（大阪大学 2021 年博士課程修了）

熊谷氏は博士後期課程修了後、東亜合成に就職し無機系微粒子の研究開発に携わっておられる。人と話すのが好きな性格で商社マンへあこがれるなど、当初は修士への進学を迷われたそうである。しかし、学部 4 年時に博士課程教育リーディングプログラムと出会うことで、異分野の方々との交流、海外留学やインターンシップ、修士 1 年からの奨励金などの充実した支援体制を知り、博士への進学を決められた。約 3 か月他分野の研究室で研究を行う研究室ローテーションを活用したことや、海外インターンシップにより世界的権威の教授の下で研究を行えたことなど、様々な方々との交流を通じて、好きな研究に没頭出来たそうである。これらの経験を踏まえ、学生の皆さんへ「(1) 常にアンテナを張り、変化のチャンスを逃さない。(2) 自身の専門領域で学んだ深い経験は、他分野でも大いに役立つはずである、(3) 自己解決に拘らず、研究室の枠を超えて協力を仰ぐことは博士課程こそ大切である、(4) 自分の研究に自信をもって、英語で発信することができれば「鬼に金棒」である。(5) 自身の性格を客観的に分析し、自分に合った組織を見極めることこそキャリア選択では大切。」などのアドバイスを頂いた。

## 6. 参加者による意見交流会

### 6.1 交流会の目的

近年では、博士課程修了後の進路に関して、大学教員のポスト不足をはじめとして不安を抱く修士・学部の学生が増えているためか、博士課程への進学者は減少している傾向にある。

これを受けて、本年度の八大学博士フォーラムでは、博士課程の学生生活における経済面や就職活動における不安、修了後のキャリア形成などについて意見交換を行うことにより、博士課程学生がキャリアプランを組み立てていく上での課題や必要な経済面・就職面での支援制度を考え、博士課程へ進学する学生の増加、在学中の修士・博士学生にとって有益な情報の提供、自身のキャリアプランを再考できる機会をつくることを目的とした。オンライン開催のメリットを活かし、八大学学生を主体とした意見交流会を、様々なツールを活用して実施した。

### 6.2 交流会の流れ

交流会では、本フォーラムのテーマおよび参加登録の際に行った事前アンケートを踏まえ、4つのトピック（①博士課程進学後のキャリアプラン・パス、②博士課程学生の就活事情、③博士課程のインターンシップ、④博士課程を通して身に付いた能力・素養）を準備し、Zoom上でそれぞれブレイクアウトルームを作成するとともに、各ルームに学生実行委員をファシリテーターとして配置した。

さらに、オンライン上で利用可能なホワイトボード形式のツール「Miro」を導入することにより議論の活発化を図った。準備として各トピックのフレームを用意し、ファシリテーターが各々議論の進行法を考え、さらに参加者に事前アンケートに記入して頂いた「博士進学に対する不安」をあらかじめ反映させた。さらに1つのホワイトボード上に各フレームが存在する利点を生かし、議論進行中のメインルームでのボード全体共有による議論の可視化とまとめ発表時のスムーズなフレーム切り替えを目指した。

また、ディスカッションは前半・後半に分割し、八大学の代表学生および講演者の皆様には前半は決められたルームに、後半は自由に移動できる形式とした。なお、それ以外の議論希望者・聴講者は完全に自由に移動できる形式にするとともに、聴講者の積極的な参加を促すべく、「Comment Screen」というツールを導入した。

Comment Screen は、スマートフォンやパソコンのブラウザ上で入力した文字列やスタンプを、Zoomの画面共有上に表示することのできる無料のWebサービスである。今回の意見交流会では、議論への参加を希望しない聴講者が多かったため、(1)聴講者にも参加意識を持ってもらうこと、(2)顔出し・声出しをせず匿名でコメントができるため、より率直な意見が出てくること、(3)共感のコメントやスタンプが議論をより盛り上げること、以上3点を期待して導入した。

以上の流れで交流会を実施し、各ルームの議論終了後にメインルームへと戻り、ファシリテーターより各ルームにおける議論の内容について、Miroを用いて発表した。

### 6.3 交流会のトピックおよび概要

#### ① 博士課程進学後のキャリアプラン・パス

本グループでは、「若手研究者・技術者からのエール」でご講演いただいた安川様を交え、民

間企業において博士課程修了者が持つ強みや、アカデミアにおけるポストやキャリアプランの構築について意見を交わした。はじめに、民間企業において博士号を持つ人材の強みや求められる能力や関して意見交換を行った。その中で、研究活動で培ったプロジェクト運営能力や文章作成能力・プレゼン能力の高さが博士号所持者の強みであり、広く求められる能力であるといった意見が述べられた。

続いて、アカデミアにおけるポストの獲得や就職後キャリアプランについて議論を行った。アカデミアのポストに就くためには在学中にどのような準備をするべきなのか、アカデミアのポストを獲得した後のキャリアアップには何が必要なのかについて、不安や疑問を交えながら意見交換をした。その中で、アカデミアのポストは数が限られているため、巡ってきたチャンスを逃さないためにも、着実に業績を積んでいくことと、日頃の情報収集が重要であることが挙げられた。

## ② 博士課程学生の就活事情

本グループでは、「若手研究者・技術者からのエール」でご講演いただいた熊谷様を交え、就活に対する様々な不安や、民間企業かアカデミアのどちらを目指すかについて意見を交わした。就活に対する不安として、周囲に博士課程学生が少ない学生は、自分の研究分野の博士学生がどのような進路をたどったのかの情報を得にくいことがあげられた。民間企業就職に関しては、博士課程における研究と企業での業務内容のマッチングの難しさや、大手企業と中小企業のどちらが自分の力を活かせるのかについて、アカデミア就職に関しては、ポスト先の探し方についてや、アカデミアと企業の行き来を通して得られるメリットなどについて意見交換を行った。

博士課程在学中の学生はもちろん、博士課程を目指す学士・修士課程学生にとって、一步先を歩むロールモデルの存在は進路選択の上で極めて重要である。今後期待する取り組みとして、すでに各大学に蓄積された就活体験記やその先のキャリアパスに関わる情報を八大学間で共有することにより、より多くの情報にアクセスできる環境の構築があげられた。

## ③ 博士課程のインターンシップ

本グループでは、工学系教育研究センターで「ジョブ型研究インターンシップ（国内企業にて、長期間かつ有給の研究インターンシップに参加し、その評価を受けて、単位を修得する）制度」の導入を推し進める矢久保考介先生を交え「博士課程在籍時のインターンシップ」について意見を交わした。参加学生は、修士課程・博士課程の5~6名が声出しで常時参加し、20名ほどが聴講していた。議論の話題として「若手研究者・技術者からのエール」でご講演いただいた中澤様の講演内容（1.VUCA 社会の到来-Society5.0 に向けて、2.博士課程を取り巻く現状について、3.ジョブ型研究インターンシップについて）が大きな土台となり、学生中心に互いの経験や周りの学生との意見を多く話し合うことができた。具体的には「実際にインターンに行った学生がどうなったか」「教員目線でインターンを推奨する（あるいは見分ける）べきポイント」の質問に対し、矢久保先生に回答いただきながら「自分はどのように考えるか」を率直に話し合う良い機会となった。特に研究成果を出すことが第一に求められる博士後期課程のカリキュラムにおいて、単に企業の労働力となり採用活動の一環として扱われることを避けたいと願う学生の強い想いが共通しており、企業との連携を図りながらインターンシップを通して学術論文を投稿できるような協

力体制が築けることが学生側からの要望であると参加学生同士の中で強く話し合われた。従来に比べ、多くの選択肢が増えた（当然それらの情報を見分ける能力は求められる）現代だからこそ我が国の将来のために「どのような研究生活、ひいては学生生活全体を過ごすべきか」を日々考えながら研究を進めることが重要であると本グループでの意見交換としてまとまった。

#### ④ 博士課程生活を通して得られた能力・素養

本グループでは、「若手研究者・技術者からのエール」でご講演いただいた吉中様を交え、修士学生にとって博士課程進学を決意する後押しとなるであろう「博士課程に進学することにより身に付いた素養や能力」について意見交換を行った。

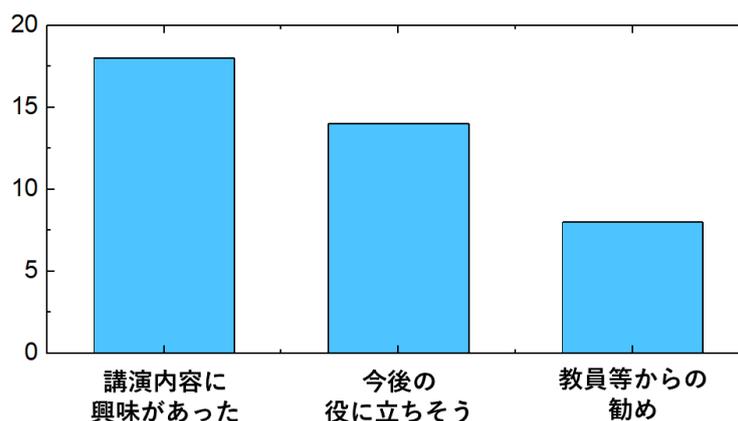
はじめに、博士課程での土台となる修士課程において修得すべき能力を列挙し、それを博士課程でどのような取り組みによって発展させるかを議論した。その中では、例えばPCスキルや初歩的な研究遂行能力といった幅広い分野で通用する能力を起点として、博士課程では主体的に研究活動に取り組む中でこれらを実践的な能力へと昇華させ、自身の研究を科学的かつ分かりやすい文章で説明できるだけでなく、研究の位置付けや価値を俯瞰的な視点から把握できる高次の能力を獲得できることについて、具体的な体験談を取り入れた議論が交わされた。さらに、これらを身に付けて社会で活躍している方々から、社会のトレンドやコンプライアンスを把握して自身の研究とのつながりを考える価値創造能力や、心身を健全に保ちながら限られた時間の中で成果を出す高度な実践力の獲得など、博士課程を経ることの大きな魅力となり得るであろう内容について、様々な観点から意見交換を行った。

修士から博士課程へ学生として進学することは、自己の能力・素養を磨くための十分な時間・機会の確保という観点から見て、極めて魅力的なキャリアプランの一つであると考えられる。今回の意見交流会を踏まえ、従来の経済面・就職面の難しさから植え付けられた博士課程へのネガティブなイメージが払拭され、少しでも博士課程への進学を視野に入れた学生が増えてもらえればと思う。

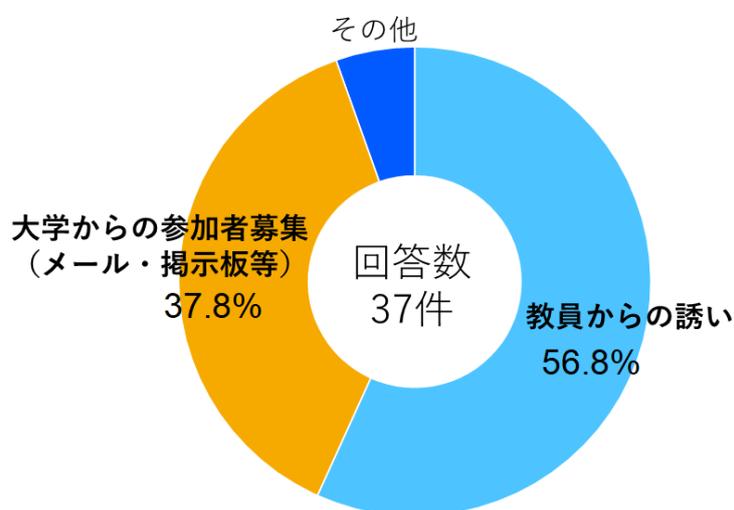
## 7. 参加者アンケートの集計結果

完全オンライン開催 2 回目となる博士フォーラムについて、オンライン環境を生かすために新たに行った取り組みの効果や、今後の博士フォーラム開催に関わる参考情報を得るため、参加者アンケートを実施した。有効回答数は 38 件であり、すべての項目は回答任意とした。

Q.博士フォーラムに参加した動機は何ですか。

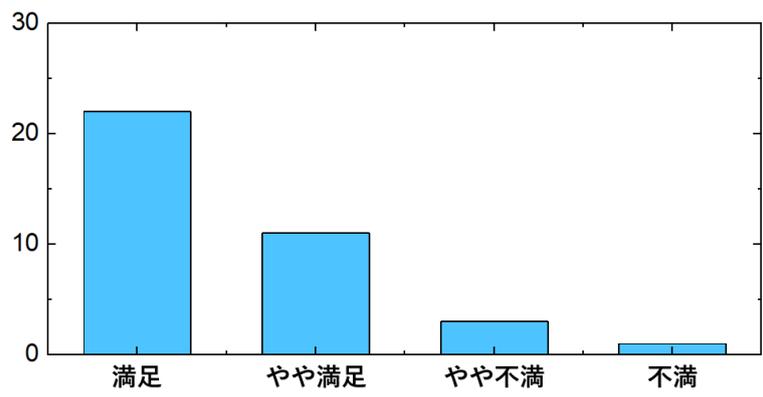


Q.博士フォーラム開催を知ったきっかけは何ですか。

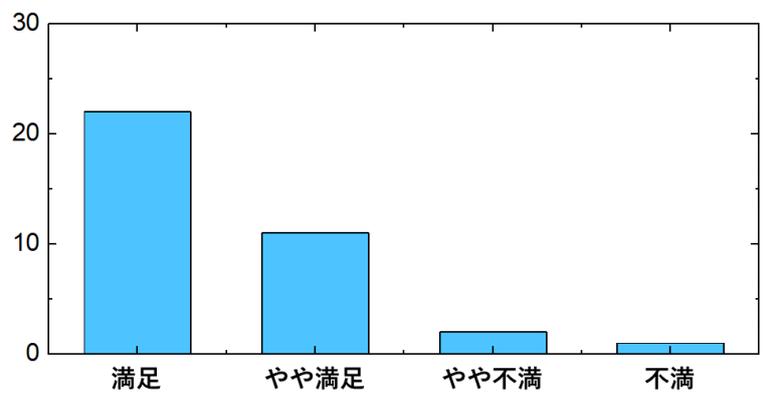


教員からの誘い以外にも、大学からの情報提供を通じて本フォーラムの開催を知り、参加した方も多くいたようである。オンラインの特性を生かし、学部学生から博士課程学生（社会人学生も含む）幅広い層の参加を得ることができた。

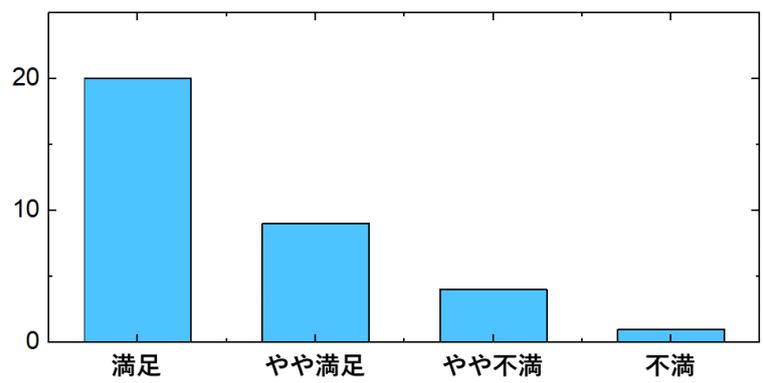
Q.博士フォーラム全体を通しての満足度はいかがでしたか。



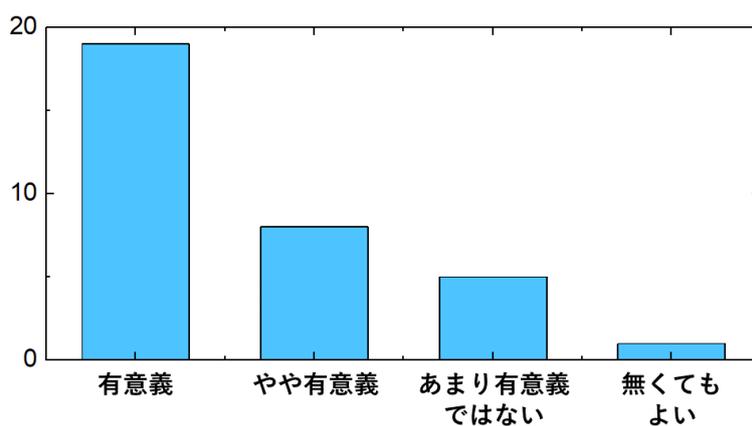
Q.講演の満足度はいかがでしたか。



Q.意見交流会の満足度はいかがでしたか。

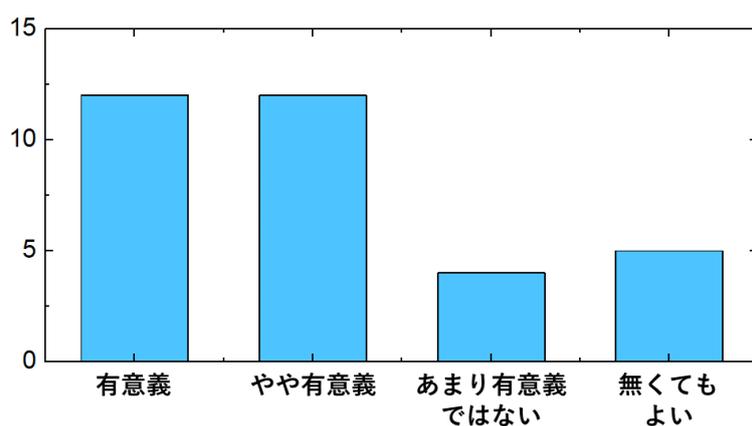


Q.意見交流会を活発にするために用いたオンラインホワイトボード（Miro）はいかがでしたか。



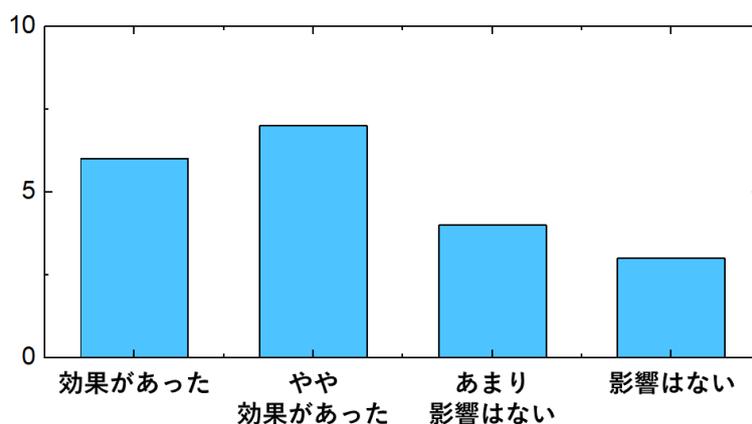
ホワイトボードツール Miro に対する評価はアンケート回答者のうち、有意義が 5 割以上、やや有意義まで含めると 8 割以上に良い評価を頂いた。議論の内容が可視化され、話の方向性の指針になったのではないかと思う。メインセッションで議論用のフレーム全てを画面共有し、他のブレイクアウトルームで何が話し合われているか確認できるようにしていたが、そもそも部屋を移動する人があまりいなかった（司会進行として議論の様子をモニターすることには非常に役立った）。今回は各ブレイクアウトルームのファシリテーターを努める実行委員が綿密に各フレームの事前準備を行ったが、今後の開催で用いる際は、参加者から意見を募る実行委員の負担も考慮すると簡素な状態で始めて良いと思う。

Q.意見交流会を活発にするために用いた画面上のコメント（Comment Screen）はいかがでしたか。

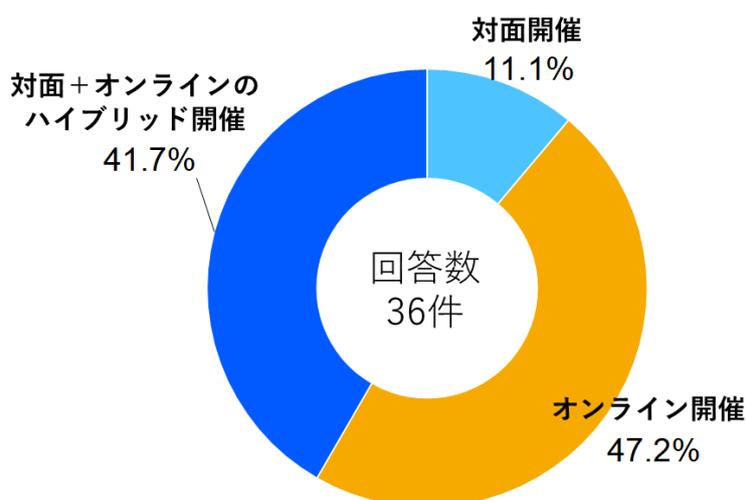


Comment Screen に対して、有意義・概ね有意義と感じている人は 70%を超えており、導入の意義はあったと考えられる。議論のグループにより活用の程度・参加者の利用率は様々であり、活発にコメントが行き交ったグループもあれば、そうでないグループもあった。ファシリテーター役が Comment Screen の使用を促すことや、使用方法の事前周知を通して利用率が上がれば、より議論が盛り上がるだろう。

Q.修士課程および学士課程の方にお伺いします。博士フォーラム（午前の部）の参加を通して、博士課程進学への興味関心が高まったり、不安が軽減されたりしましたか。



Q.来年度以降の八大学工学系博士フォーラムの開催の形式について、どのような形式が好ましいと思いますか。



開催方法に関するコメントとして、「博士課程ではない学生にとってオンライン開催は敷居が低くて参加しやすい」「オンライン開催だと開催地に関わらず参加できる」「出張に割く時間が削減できる」などオンライン開催に対する好意的な意見が寄せられた。対面開催が可能な状況となっても、オンライン開催やオンライン参加の選択肢のあるハイブリッド開催を期待する学生や教員は少なくないだろう。

その他今後の開催に関する意見、取り上げてほしいトピックとして、

- 多言語対応
- 博士進学時や進学後の研究方針、テーマ、研究室変更について
- 具体的な金銭的援助や助成金の獲得方法について

これらを期待する意見が寄せられた。

Q.博士フォーラム全般に対するご意見・ご感想（寄せられた文章をそのまま記載した。）

- 学士課程生徒にもとてもためになる内容だった。特に研究に対する姿勢については勉強になるものがあった。今後活用していきたい。
- 案内が不足してよくわからなかった。
- 様々な研究分野、立場、考え方の人からお話を伺えて、新しい視点を得られました。有意義な時間でした。ご企画ありがとうございました。
- 自分の大学以外の方で自分と専門が異なる方との初めての交流の機会でした。私は M1 でして博士課程への進学を迷っているところですが、今回のフォーラムでは予想以上にたくさんの方の新しい考え方を持ち帰ることができて大変満足しております。来年度も参加させて頂きたいと考えております。ありがとうございました。
- 通常の学生であればほとんどが直面する「お金」や「ポスト」の不安に議論が集中していたが、それよりも「博士課程としてどういうスキルを持っていけば就職に困らないのか？」に議論を向けないと根本解決はいつまでたってもしないと思った。国の制度による部分もあるが、それよりも学生自身が意識改革をしないと路頭にさまよう博士課程出身者は減らないと感じた。企業は研究成果を出したことよりも、いかに誠実に研究と向き合ってきたかを見ると思うので、少なくとも企業への就職は普通の人であればそんなに心配はいらないと思う。
- ディスカッションの時間がより長かったらよかったですと思います。
- 学生主体の運営が非常にスムーズで素晴らしかったと思います。OB の方々も積極的に議論に加わっていただき、有意義なフォーラムでした。
- 運営の方の連携が素晴らしいと思った。しっかりと準備をしている様子が伺えた。博士卒の方から就活に対するアドバイスを直接頂ける機会はなかなかないので非常に有難かった。他の博士学生の本音を聞いたのもよかった。
- さまざまな博士課程卒業の方々からお話をお伺いできて良かったと思います。
- 政策に携わる方のお話しを直接うかがえる機会は有意義であった。博士人材への金銭的支援は過去よりも多くなっている実感はあるものの、応募に係る時間・手間や競争的資金としてのネームバリュー、職歴になること等を総合して考えると、学振の採択人数を増やすことが最善と個人的には思う。

## 8. おわりに

本年度の八大学工学系連合会 博士フォーラムでは、「博士学生のキャリアプランを考える」というテーマを掲げ、博士課程の学生や博士進学に興味を持つ修士・学部の学生にとって有益となる博士課程修了後のキャリアプラン・キャリアパスについて、産・学・官の方々によるご講演や参加者同士の意見交流会を通し、様々な視点から博士学生のキャリアプランを考える機会の提供を行った。

参加者への事前アンケートや産・学・官の皆様の講演内容を踏まえて行われた「博士課程進学後のキャリアプラン・パス」、「博士課程学生の就活事情」、「博士課程のインターンシップ」、「博士課程を通して身に付いた能力・素養」といった様々なトピックに関するディスカッションは、博士学生にとって本当に必要な支援制度や不安な事項を生の声として救い上げることができた。特に、博士を卒業した社会で活躍されている方々や現役の博士学生と修士・学部の学生が一堂に会して意見交換を行えたことは、参加者の皆様にとって有意義な機会を提供できたのではないかと思う。

本フォーラムの開催が、博士への進学を視野に入れる修士・学部学生の増加や、現役で博士学生として活躍されている方々のキャリアプランに関する不安の払拭、博士学生にとって真に有効な支援制度の構想など、博士をとりまく現状の改善に繋がれば幸いである。

資料 1 参加登録者名簿

氏名	大学名	所属専攻等名	学年
秋葉 祐里	北海道大学	工学研究院	PD
呉 与宸	京都大学	原子核工学専攻	D3
手崎 和明	東京工業大学	工学院 電気電子系	D3
間藤 芳允	北海道大学	総合化学院	D3
張 守龍	北海道大学	土木工学	D3
LIU Guangwei	名古屋大学	Civil Engineering	D2
大平 義輝	大阪大学	システム創生専攻	D2
森川 健太郎	京都大学	マイクロエンジニアリング	D2
イ ジソク (Lee Jisuk)	京都大学	化学工学	D2
任 傑	京都大学	化学工学	D2
大屋 祐太	北海道大学	環境社会フィールド工学	D2
曹 永旻	大阪大学	基礎工学研究科システム創成専攻	D2
小司 優陸	北海道大学	空間性能システム専攻	D2
清水 桜子	京都大学	工学研究科 機械理工学専攻	D2
八木 魁人	京都大学	工学研究科 合成・生物化学専攻	D2
牧野 航海	名古屋大学	工学研究科・生命分子工学専攻	D2
高橋 健	京都大学	工学研究科分子工学専攻	D2
石原 一輝	名古屋大学	航空宇宙工学専攻	D2
岩井 愛	北海道大学	材料科学専攻	D2
勝原 哲	北海道大学	総合化学院総合化学専攻	D2
Xin Guan	大阪大学	統計	D2
周 安博	大阪大学	物質創成専攻	D2
薛 高格	北海道大学	機械宇宙工学専攻	D2
高田 裕司	京都大学	マイクロエンジニアリング専攻	D1
石黒 理紗	大阪大学	基礎工学研究科システム創成専攻	D1
CUI TONGTONG	北海道大学	機械宇宙工学専攻	D1
深田 真衣	北海道大学	機械宇宙工学専攻	D1
福島 弘大	九州大学	機械工学	D1
名田 茂	東京工業大学	工学院 情報通信系	D1
塚本 脩仁	大阪大学	工学研究科	D1
笠井 美玖	東北大学	航空宇宙工学専攻	D1
中村 将志	京都大学	高分子化学専攻	D1
窪田 博之	京都大学	高分子化学専攻	D1
棚橋 慧太	北海道大学	材料科学専攻	D1
宮本 真之	京都大学	材料工学専攻	D1
菅浪 誉騎	北海道大学	情報科学	D1
坪井 和史	東北大学	情報科学研究科	D1
松本 龍彦	大阪大学	大学院基礎工学研究科 システム創成専攻 数理科学領域	D1
Tang Zhenling	東京工業大学	電気電子	D1
木村 光男	東京大学	物質系専攻	D1
園田 大貴	九州大学	量子物理工学専攻	D1
LI CONG	北海道大学	Division of Materials Science and Engineering	修士課程
Yuhong Lv	東京工業大学	Engineering Department	修士課程

Chen Cheng	東京工業大学	Information and Communications Engineering	修士課程
Xie Xin	北海道大学	エネルギー環境システム専攻	修士課程
根本 悠樹	京都大学	マイクロエンジニアリング専攻	修士課程
余 沛煜	東京大学	メディカル情報生命専攻	修士課程
安井 翔一郎	北海道大学	応用物理学専攻	修士課程
坂本 亮	東京工業大学	環境・社会理工学院 土木・環境工学系 土木工学 コース	修士課程
佐々木 重也	北海道大学	機械宇宙工学	修士課程
山崎 雅也	北海道大学	機械宇宙工学専攻	修士課程
堀内 晶裕	北海道大学	機械宇宙工学専攻	修士課程
内藤 祐太	北海道大学	機械宇宙工学専攻	修士課程
西山 諒	北海道大学	機械宇宙工学専攻	修士課程
船木 優大	北海道大学	機械宇宙工学専攻	修士課程
山崎 拓也	北海道大学	機械宇宙工学専攻	修士課程
山田 理子	北海道大学	機械宇宙工学専攻	修士課程
前田 修作	大阪大学	機能創成専攻	修士課程
Jiating Li	北海道大学	空間性能システム専攻	修士課程
LIU WEI	京都大学	建築学	修士課程
斎藤 天丸	東京工業大学	工学院機械系機械コース	修士課程
浅間 智広	北海道大学	工学院材料科学専攻	修士課程
北條 励	東京工業大学	工学院電機電子系電機電子コース	修士課程
油原 和公	京都大学	工学研究科高分子化学専攻	修士課程
原田 怜	九州大学	工学府 材料物性工学専攻	修士課程
出口 翔大	九州大学	工学府建設システム工学専攻	修士課程
佐藤 啓花	京都大学	工学部	修士課程
亀水 豪	北海道大学	材料科学	修士課程
宮内 海斗	北海道大学	情報科学科情報科学専攻	修士課程
西浦 翼	北海道大学	情報科学専攻情報理工学コース	修士課程
LIANG DEFA	東京工業大学	情報通信コース	修士課程
藤本 浩太	東京大学	新領域創成科学研究科	修士課程
李 采訓	北海道大学	総合化学	修士課程
江部 陽	北海道大学	総合化学院	修士課程
梅澤 朱理	北海道大学	総合化学院生物化学コース	修士課程
Ryota Suzuki	北海道大学	総合化学専攻	修士課程
西村 大輝	北海道大学	総合化学専攻	修士課程
徳丸 悠二郎	大阪大学	地球総合工学専攻	修士課程
加藤 竜樹	東京工業大学	電気電子	修士課程
SONG YIKAI	東京工業大学	電気電子コース	修士課程
百瀬 智也	東京工業大学	電気電子系	修士課程
金浜 瞳也	北海道大学	北方圏環境政策工学専攻	修士課程
東山 竜土	北海道大学	機械宇宙工学専攻	学士課程
張 倬豪	東京工業大学	機械系	学士課程
池田 達哉	京都大学	建築学科	学士課程
小川 景太郎	北海道大学	工学部 機械システムコース	学士課程
高橋 佑大	北海道大学	工学部応用理工学	学士課程

富士 航至	北海道大学	工学部応用理工系学科	学士課程
馬場 江未瑠	北海道大学	工学部応用理工系学科応用化学コース	学士課程
安池 亮	名古屋大学	工学部環境土木・建築学科 環境土木プログラム	学士課程
仲本 義邦	北海道大学	工学部機械知能工学科機械情報コース	学士課程
蜂谷 啓人	北海道大学	工学部機械知能工学科機械情報コース	学士課程
北田 敦也	京都大学	工学部物理工学科	学士課程
水嶋 亮太	九州大学	船舶海洋工学	学士課程
北川 和輝	名古屋大学	電子工学専攻	学士課程
石井 航	九州大学	物質科学工学科	学士課程
宮島 里奈	東京工業大学	理学院数学系	学士課程
前田 裕輔	北海道大学	量子理工学専攻	学士課程
SHE WEI	九州大学	情報理工学	研究生
Landon Kamps	北海道大学	機械・宇宙航空工学部門	教職員
中村 孝	北海道大学	機械・宇宙航空工学部門	教職員
藤村 奈央	北海道大学	機械・宇宙航空工学部門	教職員
佐藤 太裕	北海道大学	機械・宇宙航空工学部門	教職員
Nobuyuki OSHIMA	北海道大学	機械宇宙工学	教職員
永田 晴紀	北海道大学	機械宇宙工学専攻	教職員
矢久保 考介	北海道大学	工学研究院応用物理学部門	教職員
米沢 平成	北海道大学	人間機械システムデザイン専攻	教職員
湯上 浩雄	東北大学	機械機能創成専攻	教職員
植松 友彦	東京工業大学	工学院 情報通信系	教職員
杉野目 道紀	京都大学	合成・生物化学	教職員
馬越 大	大阪大学	基礎工学研究科	教職員
中島 邦彦	九州大学	材料工学専攻	教職員
田村 良一	九州大学	大学院芸術工学研究院	教職員
瀬戸口 剛	北海道大学	大学院工学研究院	教職員
泉 典洋	北海道大学	大学院工学研究院	教職員
八大学工学系連合会事務局	八大学工学系連合会	—	—